

ストリングの基礎知識

From テニサー



解説=松本雅浩(テニスサポートセンター渋谷店)

知っているようで、実はあまり知られていないストリングのこと。今月号からは、そんな読者から寄せられた素朴な疑問を、プロのストリンガーに答えてもらいました。テニスライフの向上に役立ててください！

【今月のお題】

ストリングを長持ちさせる方法と、太さによる打ち味の違いについて。

学生時代にテニスを始め、無類の道具好きが高じて現職に。英語のほか独語や仏語も再勉強中で海外の方にも対応。ストリンガー歴12年

Q

ストリングを長持ちさせる方法がありますか？

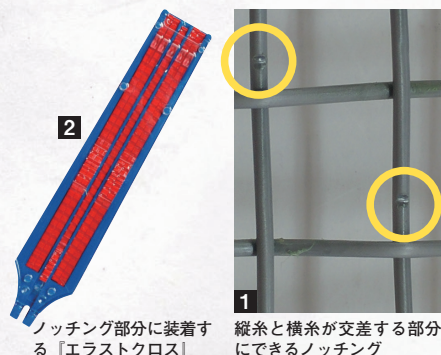
(テニス歴15年/Y・Sさん)

大きく分けて、2つのケースが考えられます。

1、切れないようにする

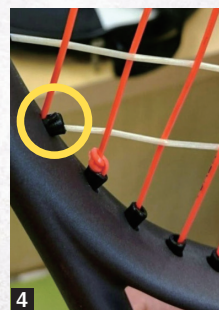
まず1つは、ノッチング対策。ノッチング(写真①)とは、ストリングの縦と横が交差する所に発生する食い込みのこと。打球を繰り返すことで進行し、やがて破断します。上級者ほど同じ所で打つため進行が早いです。ノッチングを抑制するアイテムには、「エラストクロス(写真②)」という商品があります。ノッチングが生じやすい所に微細なチップをかませるもので、ナチュラルストリングなど柔らかい材質でできたストリングを愛用する方には、特にオススメです。ただし、あまりボールの当たらない所に付けすぎると、打球感が悪くなるので注意しましょう。

「スピンプラス(写真③)」に代表さ



① 縦糸と横糸が交差する部分にできるノッチング

② ノッチング部分に装着する「エラストクロス」



④ 破断してしまったグロメット



③ ストリングの滑りを良くする「スピンプラス」

「スピンプラス」に代表さ

2、テンションを維持させる

最近では技術革新によりテンション維持性能に優れたストリングもありますが、そうした性能とは別に、張り替えたストリングをダメにさせない方法もあります。それは「保管状態に気を配る」ことです。暑さや湿気はストリングに有害です。そのため夏場は特にラケットの収納方法に注意が必要になります。

Q

太いのと細いものでは、打ち味はどう変わりますか？

(テニス歴2年/H・Kさん)

テニスを終えたら、ラケットはバッグに入れたままの方もいますが、それは避けましょう。なぜなら、ストリングには想像以上に大きな力が掛かり続けているからです。50ポンドで張った場合、約22・6kgの力が掛かり続けています。そのためラケットをバッグに入れたままだと、高温と湿度にフレームとストリングが耐えられず、テンションを維持できなくなり、特に夏場は可能な限り涼しい場所で保管しましょう。ハイブリッドを含め、ナチュラルストリングには、乾燥剤もお勧めです。

ストリングの材質や構造にもよりますが、一般的に「太いもの」は球持ちが長くなり、打ち応えのある感触となる傾向、「細いもの」は球離れが早く弾きの強い、よりシャープな感触になる傾向」となります。そのため太いストリングは、ボールの飛びやスピンのかかりを、ストリングのアシストに頼らず、自分自身の力で実現したい方にお勧めです。一方で細いストリングは、ボールの飛びや速さをストリングで補いたいと考えている方に向いています。

またストリングを選ぶには、ラケットとの相性も重要です。近年は剛性が上がり、ボールを効率よく飛ばすアシスト機能を備えたラケットがあります。そのため「とにかくボールを飛ばしたい」と思い、「飛びの

良いラケット」と「細く球離れの良いストリング」を合わせる方がいます。しかし、このセッティングだと打ち手にとっては、自分自身の力を伝える前にボールが飛びすぎ、イメージと実際のボールの飛び方のギャップに大きなストレスを感じてしまうケースが見られます。

反対に飛びを抑えてコントロールを求めようとして、アシストが少ないうラケットと太いストリングを組み合わせた場合、手元に伝わる衝撃が大きくなり過ぎることもあります。張り上げるストリングの材質、やテンションによってケガにつながる恐れもあり、注意が必要です。

実際、店頭においてもテニスを始めたばかりの方や、数年ぶりにテニスを再開された方を中心にラケットとストリングの相性で問題が起きています。ストリングとラケットの相性については、ぜひストリンガーに確認してください。プレースタイルや目標とする選手を伝えれば、最適な助言をしてくれるはずです。

【ストリング都市伝説】 ノットを作る向きは決められている

ラケットを張り上げる際、ラフ側面へノット(結び目)を作るのが一般的ですが、こうしなければルール違反ということではありません。由来は諸説あるようですが、今日では特に多数のスタッフで張り替えを担当する場合、仕上がりにより統一感を持たせるため、こうルール決めしていることが多いようです。また海外の大会では近年、スムーズ側面にノットを作ると決めているケースもあるそうです。